

NEWSLETTER

No. 18

岐阜大学国際交流室 1993年12月25日

●目次

提携校との交流

大学の街ルンド	中須賀徳行 1
岐阜大学からルンド大学へ	岩上良子, 木野村淳子 3
ルンド大学から岐阜大学へ	テレース・ロフグレン, ハンス・ジョンソン 5
1993年度夏期短期留学・最終討論会についての報告	瀬戸崎康子・坂本秀生 6
[特集] 短期留学生の受入れ	
短期留学生受入れを終えて	和田昭夫, 前川 清, 野崎 進・道子 8
ホームステイファミリーから	10
報告 国際理解の集い	金丸義敬 11
後期日本語クラス時間割表・編集後記	12

提携校との交流

岐阜大学では国際交流室が中心となり、提携校からの短期留学生の受入れ、および留学生の派遣を行っている。今年も、ノーザンケンタッキー大学から2名、ルンド大学から15名の留学生を受入れ、例年の倍以上の人数となった。日本語の授業を中心に、日本の文化に接するための数々のエクスカージョンが用意されている。

大学の街ルンド

国際交流室 中須賀 徳行 (教養部)

岐阜大学は現在11の大学と国際交流提携を結んでいるが、なかでもスウェーデンのルンド大学(Lund University)は比較的長いお付き合いの歴史があるだけでなく、互いに夏季短期留学プログラムを実施して、学生が定期的に交流しているので重要な位置にある。ルンド大学は北欧最大の大学で、著名な学者も数多く抱えている。例えば、原子スペクトルの所で出てくるリュートベリ(Rydberg)もこの大学で学び、そこで教えた人である。化学の分野でHSAB(Hard and Soft Acids and Bases)の理論は、反応の仕方を定性的に

予見する上で簡単ながら有用なものであるが、それを最初に指摘したアールランド(Sten Ahrlund)も永年この教授だった。国際会議の席や名古屋でお会いしたり、教え子がそこへ留学もしたので、ルンドは私にとっても比較的馴染みのある名前ではあったが、まだ訪れた事はなかった。幸いこの夏専門日本語の教育法などについて討議するため訪問する機会を与えられたので、その時に見たルンドの街や大学についてご報告したい。

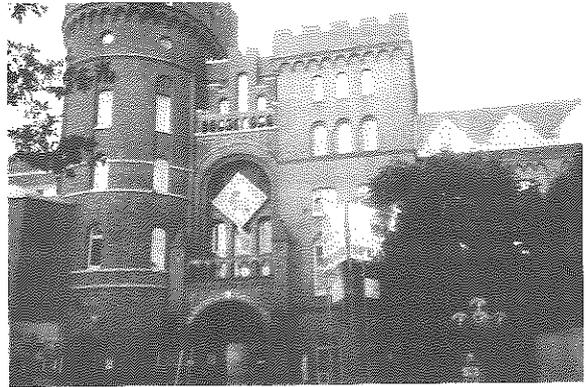
コペンハーゲン空港からバスに乗り、すぐフェリー

上の人となってそこで食事でもしているともう隣のマルメに到着する。そこからタクシーで（電車もあるが）20分もするとルンドである。ルンドは東西、南北ともに4km程の小さな街であるが、それだけに静かで美しい所である。街の中央にはカテドラルが聳え、正午になると時計から人形が出てきて時を告げる。案内してくれた中国語が専門のクリスティーナ・リンデル博士は、今年の夏にルンド大学を定年退官したばかりであるが、このからくり時計が好きで、ときどきやってきては人形の動きにしばし時を忘れるとの事であったが、私たちが訪れた日は、丁度 Kristina の日であると時計には記されていた。ここから2、3分も歩くと大学の本部があり、その隣の建物の中には国際交流室（International Office）があって、いつも手紙などでやりとりをしている国際秘書のビルグレン夫人が笑顔で出迎えてくれた。ヨーロッパの古い大学らしく、一つのキャンパスに集中しているわけではなく、街のあちこちに大学の建物がある。そのため、岐阜大学からこの夏短期留学にやって来た学生たちが、指定された交流室に行こうとタクシーに乗ったものの、運転手も所在が分からず迷ってしまった。かつてこのスコネ地方はデンマーク領であったが、戦争の結果1658年スウェーデン領となり、文化的にもスウェーデン化するためその8年後にルンド大学が生まれたとリンデル博士が解説してくれた。今でもこの辺りはデンマークの香りを色濃く残しているそうである。

今回の訪問を通じて印象に残った事の一つは、日本あるいは日本語に対する関心が極めて高くなり、それが例えば入学希望者の数に現れている事であった。ルンド大学の場合、千人近い希望者があり、その中から日本語学科に20名だけ入学を許されるという事であった。高校の成績で言えば、5点満点で4.7以上でない



Mrs. Boel Billgren (International Secretary, 左),
Dr. Keiko Kockum (日本語教育担当, 右) と。



お城のように立派なStudent Unionの建物

と入れないのだそうである。夜間公開講座のようなものであろうか、evening course というのもあって、日本に関する講義の時は、150人の学生が押し寄せるようで、20年前は僅か6人だったと、創設に関わったリンデル博士は感慨深げであった。

ちなみに、講演を頼まれて立ち寄ったカナリヤ群島のラ・ラグナ大学でも、十人前後の学生が熱心に日本語の勉強をしているとの事で、日本語の教科書などが置かれた部屋も見せていただいた。ここはスペイン領とはいえ、むしろ西サハラに近く、大西洋に浮かぶアフリカの小島である。しかし人気が高ければ好い事ばかりという訳にもいかなくて、本当に日本語をやりたい生徒が、成績が足りないために振り落とされている可能性もあると、ルンド大学で日本語を教えているケイコ・コックムさんは心配していた。

岐阜大生だけを対象とするルンド大学の夏季短期留学プログラムでは、スウェーデン語の基礎とスウェーデン事情といった講義の他に、英語の授業もあり、会話などを教えてくれる。母国語が英語に近いという事もあるが、スウェーデン人は英語がうまくて、街でも英語さえ出来れば殆ど困る事はない。ところが日本では中学から習い始めたにもかかわらず、なかなかコミュニケーションがうまく行かないのに、我が留学生諸君は初めショックと苛立ちを覚えたようである。しかしそのうちに慣れてきて、5日間にわたる旅行もあり、短いながらも楽しい留学生活のようであった。宿舎の寮も見せていただいたが立派なもので、先生たちも献身的にやって戴いていた。その分こちらも責任が重いなど感じて帰途についたのであるが、それは単にサマー・スクールだけの事ではなく、高まる日本語教育への関心や国際交流に対して、岐阜大学や文部省がきちんと対応できる体制を組むという責任の問題でもあろう。

1993年9月

岐阜大学からルンド大学へ

ルンド大学での体験

教育学部英語英文学科 岩上良子

「どうなるんだろ……」とスウェーデンにたどり着いた私はまるで人事の様に思った。Tシャツを着ているのは金髪の子供たちと、うす暗くなってきた“外国”で大荷物をかかえてうろうろしている私だけだった。違う習慣、生活様式の中での日々はすべてが新しく、興味深く、そしてまたどうやって自分の居場所を見つければいいのかもどかしくもあった。

3ヵ月ほど一人ぐらしをした私はすっかり節約の仕方が身につき、外国人学生寮に引越すことにした。何もかもがおもしろかった。そこには何とも言えない複雑で、不思議な雰囲気があった。異なる文化の断片、違う習慣・考え方の人間が混ざり合っていたからだ。20室ほどの部屋にはほとんど違う国の学生が住んでいた。イタリア、スペイン、フランス、ポルトガル、ベルギー、ドイツ、オランダ、ポーランドなどのヨーロッパをはじめ、モロッコ、コスタ・リカ、ケニアなど。デンマーク、ノルウェー、フィンランドなど近くからの学生もいる。それまではどこにあるのか正確な場所もわからなかった国だ。全員が「外国人」の立場のためか、そこでの生活はある種の連帯感があり不思議と居心地が良かった。共同のキッチンにはTVがあって、いつも誰かが何かをしていた。それぞれが自分の国の料理をつくり、いっしょによく食べた。(私はもっぱら食べるのみだった……)。夜はいつまでも終わらない。誰かが焼いたクッキーがあり、誰ともなく紅茶を入れはじめ、声をかけることもなしにぞろぞろとキッチンに集ってくる。つらい時も寂しい時も、誰かに何

かを聞いてもらいたい時も、いつもそこにはほっとする居場所があった。誰かの誕生日にはあふれるくらいの友達がこのキッチンに訪れ、それぞれの国の言葉であの例の歌、「ハッピーバースデー」を歌ってくれるのだ。日本語で歌え、と言われてよく困った。自分の部屋での勉強に飽きると本を持ってキッチンに行く。必ず同じ事をしている子がいていっしょにコーヒーを飲みながら、がんばろうと思える。よく皆で外へ出かけ、いっしょにお酒を飲んだ。いつも何かについて話していたように思う。とりとめのない話もしたが、大切なこともよく話した。戦争、人種差別、政治の事やら、宗教、恋愛、死について、宇宙や人の運命など話題はつきない。MTVでマドンナを見ていたらいつの間にかAIDSの話になり、妊娠中絶、脳死の賛否について真剣に意見を言い合う時もあった。スウェーデンという国、スウェーデン人、彼らについてのイメージや発見した事は実に様々ならえ方があり、おもしろかった。国は違っても私たちは本当の友達だった。彼らとの生活で多くの事を学んだ様に思う。ある日、外国人排斥デモがあった。その日の騒ぎは前年に比べてそうでもなかったらしいが、私たちはキッチンに集まりじっとテレビ中継を見ていた。日本じゃそんな立場になる経験はなかった。ほんの少し、人種差別、国境というものがどんなに根強く、激しい力を持つのか、そして差別される側がどれほどつらく苦しいものなのかわかったような気がした。スウェーデンは福祉国家と言われるとおり、移民する外国人は年々増加している。ベネズエラ、チリ、レバノン、ペルー、ユーゴスラビア、いろいろな人から平和と幸福を求めてここに来た理由を聞いたり、苦しんでいる自分の国の子供たちを助けたいと言っていたガーナの医学生の話聞くたび、日本がどれだけ恵まれているかを思い知らされると同時に、今までどれだけ自分が何も知らなかったか、いや、新聞、ニュースでの何てリアリティのない知識しかなかったのだろうと恥ずかしく思った。

いかにも日本人的な、言いたい事を途中まで言って目を合わせればすべてわかってもらえるんじゃないかとか、何も言わなくてもきっと誰かが気付いてくれるという考え方はまるで通じない事が身にしみてから、もともとずうずうしかった私はさらにふてぶてしくなっ



外国人学生寮で。(筆者は中央)

た。そうでなければ何もできないし、何事もすすまない。本音でつき合ってきたからこそ友達もたくさんできた。もちろん楽しい事も共有したけれど、苦しい事もお互い助け合った。

帰ってきて、まわりの人から「まあ、ひとまわりも、ふたまわりも大きくなってえ……」とよく言われる。そう、確かに太った。が、私の内側に得たものはたとえようのないほど大きく、何物にも変えられないものだと思う。ルンドで出会ったいろいろな国の学生たち。彼らとつき合って、一人一人の個性に惹かれ、考え方に何かを発見し、彼らを通して彼らの国へ少し近づくことができたと思ふ。会えて本当にうれしい。そうでなかったら多くの大切な、素晴らしい事に気付かずにきっと通り過ぎてしまったに違いない。日本がいかに平和で、豊かで、独特な文化を持つのか。いろいろな意味で日本がこれから世界の中でどんな立場に立っていくのか。ワイヤレスウォークマンを見て、「やっぱり日本はすごい！」と言ったアフリカの学生の笑顔を見て、そうだ、こんな事が出来る日本なのだから、苦しい国の人々も必ず助けてあげられるはずだ、とつくづく思った。頭の中だけ働かせても

だめだ、実際にやってみて体験し、考え、失敗し、わかったことの方が自分のものになる、と思う。その一つの方法として違う国、場所に行くのはそれだけで大きな意味がある。環境が変わると違った視点から物が見られるからだ。習慣も違う、人の考え方も違う、そんな中で今までかたまりつつあった自分の価値感が崩れていくのは少し怖くもあるが、おもしろく、新しい。良い本を100冊読むよりずっといい。雑多で新鮮な体験、漠然とした知識がこれからの自分にどんな形で、どんな方向に影響していくのか。それは今のところ全くわからない。もしかして何十年か後、何かの役に立つかもしれない。ただ、消化はしてないが、それが必ず私のエネルギーになると思う。思いきって留学を賛成してくれた母には本当に行って良かったと感謝している。興味のある方は、この交換留学のプログラムについてぜひ考えてみたらどうだろうか。必ず何か得られると思う。

今日は誰かから手紙が来てるかな、と遠くにいる友達を思いながら楽しみに待っているこのごろだ。いつかまた会いに行きたい。

Experience is the mother of science

教育学部英語英文学科3年 木野村 淳子

虫とりを知らない子供、川遊びを知らない子供、けんかを知らない子供。人や自然とのふれあいの中から、我々が知らず知らずのうちに身につけてきた、言わば生活の知恵のもつ意味は深い。例えば、幼い子供が坂道をおぼつかない足どりで下ってきたとする。だが途中でつまずき転んでしまう。彼、或は彼女は再び同じようなことをくり返し、案の定転ぶに至る。このようなことを繰り返すうちに、しかし、彼はどうしたら転ばないのかというのを、身をもって学ぶようになるだろう。初めから大人が、「危いから、そんな事ははいけません」と言ったら、その子供は貴重な経験を一つ奪われてしまったことにならないか。

自分自身で考え、手足を使って動き、知らない事に挑戦する勇気を、我々は忘れてしまっていないだろうか。そういった意味も含めて、この旅行は自分の好奇心を刺激する良いきっかけとなり得たであろう。



ルンドにて、岐阜大学短期留学生（筆者は前列左端）

ルンド大学から岐阜大学へ

サマースクールのこと

岐阜は思ったより大きいです。岐阜駅に着いたあと大学の寮までどう行ったらいいのかわかりませんでした。寮を初めて見た時に、びっくりしました。お化けの家みたいだと思いました。きたないけどなんとなくよかったです。自分で好きな料理をつくる事が出来たし、自転車ですぐ大学とあちらこちらへ行く事も出来ました。夕方になると、お茶を飲みながら、宿題をしました。今は社員寮に泊っています。日本人と一緒に住むのは新しくてもおもしろい経験になりました。日本にいる間もちろん日本語の勉強をしました。日本語の先生は五人いましたが、先生は一生けんめいに教えてくれました。日本語では教科書五週間でおえました。その上作文、漢字、インタビュー、ことわざとどっしりも習いました。日本語を覚えるために宿題がたくさんありました。私にとって、多すぎましたので勉強をするのは時々いやになってくれました。でも言葉を習うのはいつでも新しい事を出会う事だと思いますから全部でよかったです。クラスあと、私を入れて五人の女の人は二週間でけんどうをやりました。最後の授業に私達の中で、しあいがありました。よく出来なかったので皆は笑いま

テレース・ロフグレン

した。とてもおもしろかったです。岐阜大学はルンド大学より小さいけど全部は一つの所にありますから便利です。ルンド大学とちがいます。今は大学にあまりいません。旅行をするので忙しいです。八月になったら、サマースクールがおわって、帰ります。しかし、梅雨、カフテリアの料理、事務室のやさしい人、生協の美味しいアイスクリーム、寮にいる日本人などがわすれません。



乗鞍岳へのエクスカージョン（筆者は左から二番目）

岐阜大学サマースクールについて

ハンス・ジョンソン

*日本語クラス：

- 日本語クラスはとても高級でした
- 日本語のクラスのスピードは速かたけど速いのは良いと思います。ことばをならうのはいつでも新しいぶんのかたなどのれんしゅうをするのはとてもたいせつだと思います。
- 日本語はちょっとわかるようになりました。
- 日本語かいわのれんしゅうは少なかったです。私たちのグループは学生が15人あるのでクラスの間に日本語かいわのれんしゅうをむずかしいかったです。小さいグループが二つあればクラスはもう少しうかたかったです。
- さくぶんを書いたあとでまちがいを見ましたが、とても良かったと思います。
- 日本のことわざを読んで、スウェーデンのことわざ

を書くのも、楽しかったと思います。



清水寺にて

*岐阜市と岐阜大学:

- サマースクールをするのは良い場所です。いい周囲で、良い勉強の周囲です。
- たくさんおもしろい場所が近くにありますが(京都とならと高山)

*よてい:

- ぜんたいとして、とても良かったと思います。
- 家は二つにとまりましたのは、良かったと思います。諏訪山会社寮はいいけいけんです。

- 会社の見学とホームステイは良かったと思います。
- 自転車は借りた、とても良かったと思います。

*日本語の先生:

- 本当によかったと思います。

*その他:

- ぼくは岐阜大学でじゅうどうをしました。スウェーデンじゅうどうのれんしゅうとはひかくして、とてもおもしろかったです。

1993年度夏季短期留学・最終討論会についての報告

国際交流室 瀬戸崎康子(医療技術短大部) 坂本秀生(工学部)

1993年度夏季短期留学・最終討論会を7月30日、大学会館第6集会室において実施致しました。当日、雨が降りしきる中、留学生全員(スウェーデン・ルンド大学より15名、アメリカ・ノーザンケンタッキー大学より2名)と国際交流室員8名の参加を得、活発な意見交換が11時より12時過ぎまでなされました。なお、討論の内容は主として5項目(日本語・日本事情・homestay・excursion・宿舎)に限らせてもらいました。

今年度は総計17名という、夏季短期留学が始まって以来の大きなグループとなったため従来のほぼ固定化された人数のスケジュールを適用してうまく作用するかどうかという点が第1に問題となりました。結果的には、多少の不便を留学生にかけることになってしまいましたが、交流室員・事務官が力を合わせることで、無事に何事もなくコースを終了することができました。

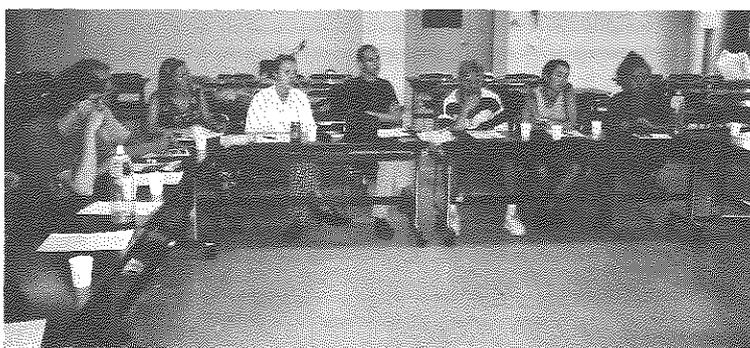
さて、上記の5項目に関する留学生の自由な意見・感想をここに紹介致します。

日本語の授業に関しては、全員が講師の先生方の熱心さを讃え、満足の様子でした。しかし、各人それぞれが小さな個々の点に対し、それぞれの希望があった事も事実でした。たとえば、主なものを挙げると、「授業の進度が速すぎて、ついていけなかった」「1回の内容が多すぎた」「宿題が多すぎた」「日本語会話の授業はもっと少人数にしてほしい」などであります。昨年までの語学を学習するという点で理想的であった人数から、一挙に1クラスが17名にも及

び、講師の先生方の並々ならぬ御努力にもかかわらず、「話す」という側面に、多少しわ寄せがあったかもしれません。今後「話す」機会とその内容に関しては何らかの見直しが必要であるかもしれません。

日本事情の講義に関しては、留学生の日本語能力が講義を聴き取るにはもう一步十分でなかったため、講義内容を理解することが困難であったようです。さらにそれに加えて、日本に関する全般的知識・理解の不足も手伝って、一層、彼らの頭の中は混乱に陥ったのであらうと思われれます。

homestay に関しては、人数とスケジュールの関係で余裕ある日程がとれず、日数も少なかったため、強い賛同の意見は聞かれませんでした。しかしながら、ある留学生からは「希望者だけに実施してほしい」とか、また、ある留学生からは「ルンドにいるうちに希望の有無・長さなどについてアンケートを取るのが良い」などという意見も述べられました。homestay に関しては、homestay 独特の問題点がいつも付きまとい、常に悩む一つの問題があります。それは home-



サマースクール反省会

stay の家族と留学生の組み合わせ、いわば相性の問題であります。たとえば今回になった一組があります。それは、かなり年配の夫婦の家庭に女子留学生が宿泊をしました。当然そこには、同年令の子供も中年の主婦もいなく、話相手はその年配の夫婦しかいませんでした。この事が彼女にとっては決定的な不満の原因になったようです。しかしながら、片や、その学生を預かった御主人は「私たちには子供がいないのでこんな可愛い女の子が来てくれてとても嬉しいです。」と述べていました。このように、この両者の言葉をそれぞれの立場でそれぞれ聞きますと、homestay の組み合わせの難しさというものを改めて感じる次第です。

excursion に関しては、全体的に好評でした。飛騨・高山への旅行は良かったということです。しかし、京都ではそれぞれの見学地で説明がなかったため、何が何であるか分からなかったとのこと。英語での説明が望まれました。また、旅行の日程とか、今どこを車が走っていて、どこに向かっているといったいろいろな情報をもっと詳細に知りたく思っていたようです。事前に旅行に関する meeting をすれば、もっと有意義なものになったかもしれません。また、特に関市での刀の見学には多くの賛同と好評を得ました。茶道入門もサッポロビール工場見学も同様でした。しかしながら、とにかく連日の excursion にさすがの留学生も疲労の色を隠すことができなかつたようです。その他、「見学先での英語のガイドが欲しかった」「奈良・京都の引率者が3人も必要か?」「奈良で予定していた見学先をパスしたのは良くなかった」「事前に見学先のパンフレットが欲しかった」「高山は良かった」などの意見も聞かれました。

いずれにしても、今回のスケジュールは全体的にきつかったようです。奈良・京都の excursion の後、週末を楽しむ時間的余裕があった学生がいた一方で、homestay の日程と祇園祭りなどが重なり、祭り見物ができず、残念がっていた留学生もいました。もっと時間の余裕が必要な... と反省をすると共に、今回はこの点も頭に入れ十分に配慮したいと考えています。

宿舎に関しては、前述した通り、留学生の数が17名に及んだため、学外研修所だけでは学生全員を収容し切れず、今回は特別に御協力を頂いた某社の諏訪山社員寮との2か所に振り分けざるをえませんでした。その結果、彼らも自ずから2つのグループに分かれた精神面においても、行動面においても負担になったようです。例えば、彼らは出発前、お互いの物を共有して

使用する計画を立てていたようですが、これが不可能になるといった予定外の事態が生じたため、ちょっとびっくりショックであったようです。勿論、彼らには説明をし、また大学の設備等の事情も十分理解してもらっていたとは思いますが、やはり1つのグループで過ごせたほうが良かったのかもしれませんが。なお、社員寮は好評で特に親切な管理人の方の存在は大きかったようです。ただ問題点として残ったことは、留学生の言葉「諏訪山は遠すぎた」にありますように、長い距離とそれにかかる時間と運賃でした。

その他、いろいろな要望がありましたので、以下に列挙します。

- 来日直前の重要な連絡は個人に対して行って欲しい。
- 日本語会話のパートナーが欲しかった。掲示板を利用して、パートナー（チューター）となってくれる日本人学生を募集してはどうか?
- 岐阜に到着してすぐ、岐阜周辺のパスツアーを行ってくれると有り難い。
- 日本人学生との交流の機会が少なかった。学生サークル、ダンスパーティーなどの情報が欲しかった。
- 剣道に参加した経験は有意義であった。
- 宿舎は学外研で良い。参加費は安い方が良い。
- NKUからの学生も8週間全部に参加出来るようにしてほしい。
- 岐阜市の交通・レストラン・娯楽の場所などの情報が記載されたパンフレットのようなものを配布してもらいたい。

以上のように、この討論会を行うことにより、留学生が何を思い、何を望んでいるかという事が次第に明らかになってきました。ここではじめて、岐阜に到着した直後の幾つかの行き違いや混乱が、連絡の不徹底にあったことが判明しました。さらにまた、岐阜大生との交流の機会を求めながらも、満たされることがなかったという留学生の姿も浮き彫りになってきました。このように、国際交流室としては、関係する情報不足の問題を今後解決するよう努めると同時に、また岐阜大学学生諸君にも、国際交流・協力により積極的な働きかけを望んでやみません。そしてさらに、今回の討論会を契機に、留学生の意見を参考にしながら、次回の夏季短期留学の計画・準備に携わって行こうと考えています。

特集 短期留学生の受入れ

短期留学のプログラムは留学生にとって貴重な体験であるとともに、ボランティアとして協力をして下さる方々にとっても忘れられない体験となっている。

短期留学生の受入れを終えて

日建産業株式会社総務部 和田 昭夫

最初に、今回留学生を受入れることになった経緯について、簡単に紹介いたします。4月下旬頃、岐阜大学国際交流室の中須賀先生、中谷先生より、当社に対して「今夏のスウェーデン留学生の受け入れに対して、施設が不足していて非常に困っている。」という旨の説明がありました。そこで当社の諏訪山寮を貸して頂けないかとの要請がありました。当社としては岐阜大学は附属病院との関わりもあり、日頃からたいへんお世話になっているため出来ることなら何とか協力したいと思い、社長、会長にもお願いし、役員会で実施する事を決定しました。岐阜市においては、このような型で企業が大学に協力する事は、初めてと聞いています。当社としてもこれが一つの機会になって、これからより一層国際貢献が進めば何よりと思っています。

いざ実施するとなると、いろいろ問題もありました。例えば、言葉の問題、生活様式の違い、食生活の違い等、数えれば限りなくありました。しかしながらこれも、案ずるより生むが安しと申すように、比較的スムーズに実施できたと思います。ただ一番強く感じた事は、文化の違いとか物の考え方が違うとか、彼らはあらゆる事に大陸的な発想をすすと思いました。反面彼らは、YES、NOに関してははっきりしている点にも戸惑いを感じたことがありました。例えば日本人は

社交辞令のつもりでいった言葉を「それは何月何日何時頃行うのか?」と、厳しく約束の実行を迫られた事もありました。日本人特有のオブラートに包んだ様な表現や、軽い冗談が通用しない事を身にしみて感じる事がありました。

今こうして終了してみると、2ヶ月間何のトラブルもなく無事終了できた事を大変嬉しく思っています。わずかな期間でしたが、スウェーデンやアメリカの学生との交流を通し、いろいろな事を学び得た事は大きな収穫と思っています。彼らが日本文化や日本企業、そしてそこに働く平均的サラリーマンの一端をご理解頂けたなら、大変良い機会であったと思います。又チャンスがあれば何らかの型で国際貢献が出来たらと思っています。



鶴飼見物

日建産業株式会社総務部 前川 清

当社の独身寮に、岐阜大学との間に学术交流協定を締結している Lund 大学（スウェーデン）とノーザンケンタッキー大学（アメリカ合衆国）の短期夏期留学生17名が6月と7月の2ヶ月間、私達と共に宿泊することを会社の上司から聞いたのは、4月の下旬のことでした。最初は、とても不安でした。というのは、自分自身に外人コンプレックスがあったからです。反面、生まれて初めての事なので、何だか心がわくわくしてとても楽しみでもありました。

5月の下旬に岐阜大学の国際交流室の先生達とミーティングがありました。その時の話では、スウェーデン人は他人の事には余り干渉せず、また日本人と違って団体行動を好まないし、生活習慣もかなり違うという事で、とても興味深く思いました。

いよいよ6月になり、留学生との初対面の日がきました。最初の印象は、男子も女子も身長が高く、体格もがっしりしているということでした。また、自己紹介等でいろいろ会話をしていくうちに、とても親しみ

やすく、明るくユーモアのある人達であり、比較的スムーズに仲良くなれました。留学生はそれぞれ新聞記者になりたいとか、弁護士になりたいとか、日本で働きたいというふうに、将来の目標が明確で、それに向かって一生懸命努力しているようでした。日本語の勉強にもかなり意欲的に取り組んでいて、夜遅くまで勉強している日も多く、日本語の上達の速さに大変驚かされました。私達も、彼らの宿題についての質問を受けたとき、過去に学んだ英単語を思い出しながら、不慣れな英語で何とか相手に理解してもらうように、真剣に答える事によって、実践的な英会話の学習になりました。

6月の下旬には、スウェーデンの盛大な行事である夏至祭のパーティーに寮生を招待してくれました。スウェーデン料理を食べたり、屋外でスウェーデン特有のダンスを踊ったりと、私達にはすべてが初めての経験で、とても思い出に残る楽しい時間を過ごせました。

7月になるとお互い慣れてきて、お酒を飲みに行ったり、銭湯に行ったりして、双方の国々の特徴や風習

等について話をしたり、ボーリング大会、花火大会、ゲーム等をして遊びました。

この留学生と一緒に暮らした2ヶ月間は、私達にとって忘れられない貴重な経験となりました。何か新鮮で素晴らしい物が吸収でき、物事を考えるうえでの視野が広がったように感じます。

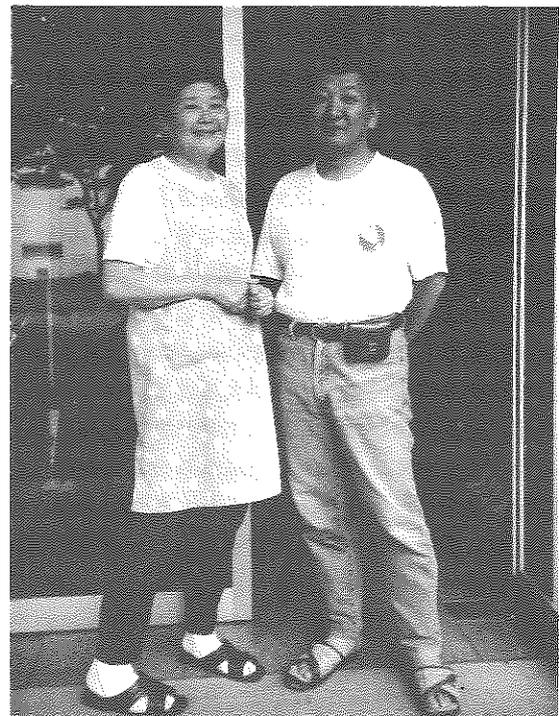


日建産業の皆さんとともに

スウェーデン、地図で見ると、なんとまあ遠い国だろうとあらためておどろく、そのスウェーデンの Lund 大学から、若い男女15名が、私達と一緒にこの社員寮で2ヶ月を暮らす事になった。私達夫婦はもちろん、寮生8名も興奮をかくせない。ついにその日が来た。先生の「今日は、色々お世話になります。」の声の後からぞろぞろとはいつて来たのは、思ったより小柄な若者達、中にはずい分背の高いものいる。しばらくは、荷物を持ってバタバタ。しばらくして背の高い一人が来て、「あー私達えー持つあーそれだけ？あー」何度くり返してもわからない。しびれを切らして、「誰か英語話せますか」ときれいな英語が飛び出した。「ええ少し話せますが」で聞いてみると、自分達の持つて上がる物はこれで全部かとの事、「はいそうです」で終り、彼も、ほっとしている。夕食は5時半から食べられるからと伝えて、夜8時半頃には寮生が全員帰って来るから、その時自己紹介をしましょうと言った後、1時間半ほど静かな時間がすぎた。5時頃になると、皆ぞろぞろと食堂に集まって来た。どうもお腹がすいているらしい。急いで用意をしてどうぞと言うと、皆一斉に食べ始めた。ちょっと心配、外人だからと言って特別な事は何もしていない。ところが嬉しい事に、全員べろりとたいらげ、御飯もおかわりしている。主

元日建産業諏訪山寮 野崎 進・道子

人と顔を見あわせ良かったねー。一度5階上に行って、8時頃にまた全員食堂に集まった。ところが、今日にかぎって寮生がなかなか帰って来ない。きっとテレク



日建産業社員寮にて

さいのだろう、ちょっとおくれて一斉に帰って来た。「ただいま！」と食堂に入って来ると、知らない顔々々、おどおどして私を見る、「みんな待っててくれたのよ、さあ自己紹介しましょう」で交流ははじまった。上手とは言えないカタコトの英語、そして同じような日本語でも若い者同士はけっこう楽しそうだ。

二日目、昼すぎに大学から帰って来て、グラウンドでキャッチボールが始まった。10分もたたない内に、一人が「ケガをした」とわめきながら、とび込んで来た。どきっとする。玄関に行きかけると、大きな身体のアンデリッシュが左半面血を流しながら、でもニコニコ笑いながらはいて来た。見ると目の下と眉の所がほんの少し切れている、まばたきをさせてみる、目の中は大丈夫、消毒をして薬を付け、処置をしてから水を袋に入れタオルをあてて、本人に1時間ぐらいいは横になって冷やすように言って、やれやれ、この分では先が思いやられる。何日かがすぎたある日、一人の寮生が、話のつづきにかるい気持ちで今度どこかへ一緒に行こうと言ったんだけど、昨日言っていたのは何日で、どこへ行くのかと聞かれたと困り顔。そこで日本独特の社交辞令は通じない事、貴方が言い出したのだから必ず約束は守る事、じゃみんまでボーリングに

行きましょうという事になり最初の合同ボーリングは大変だったけど、とても楽しい思い出になった。そして2度目。そして3度目が実現した。私達が想像していたスウェーデン人とは少し違っていた。とても、しっかりした考えを持っている事。自分の将来の目標がきまっている事、ビールを良くのんだが、とても上手にのむ、つまりのみ方に無駄がない。食生活も大変質素なのにびっくり。パーティ好きで、長時間つづけるが、これが、みごと。ゲームとか、全員で合唱するテンポの良い歌などなど、社交性にとぼしい日本人には大変勉強になりました。そして、一番良かったと思う事は、若い人達がいながらにして、外国を味わい、英語に興味を持ち、こんなにも自分達と物のとらえ方の違う人達の住んで居る国に興味を持ち、あそびではなく外国に行ってみたくてと言いだした事。おたがいを理解しようと努力し、そして、おたがいの国の文化を素直に受け入れようとした若者達の努力。これこそ、国際交流室の人達の成果だと思います。この地味な小さな努力がきっと世界平和につながると私は信じます。そして可愛いかったあの若者達が、いつの日か私達をたずねてくれる事を夢見て…………。

ホームスティファミリーから

今回留学生を受入れて下さった方々から寄せられたアンケートより、抜粋させていただきました。

郡上郡美並村 長谷川勲

はじめてのホストファミリー体験でした。良い体験をさせていただいて感謝しております。我家の3人の子供達や多くの子供たちとふれ合い、折り紙をしたりで良い交流ができたと思っております。ステイの間何の問題もありませんでした。はじめてということで忙しくサービスし過ぎたかなとも考えております。3泊程あるとまた違ったステイになるのではないのでしょうか。日程のもっと早い時期にホームステイを実施するとその後の交流機会もうかがえるのではないかと思います。私自身(44才)10月にアメリカで3日間ホームステイをさせていただくことになりましたので、この経験によりまた受入れのほうもしてみたいと思っております。機会がありましたらよろしくお願い致します。ありがとうございました。

こと、自分の息子がよく面倒を見てくれた事。今や国際化時代、我々が今国際化のために何が出来るかと考えた時に、先づ個々の人間が最も身近かに出来ることは、ホームステイだと思います。今後とも協力したく思います。

郡上郡美並村 小酒井鋭鎧

今回のルンド大学生のホームステイは、大変楽しく過ごせました。大学生の為、大人の付き合いが出来た



フェアウェルパーティーにて

岐阜市 塚本勝哉

今年もサマースクール、先生方始め皆様御苦労さまでした。ホストファミリーとして何も充分なことが出来なかったけれど、学生さんが一日私達の家庭を通じて興味を持って異文化を味わってくれたこと、と思います。尚、出来ることなら2泊～3泊、又は一週間ぐら

いの期間は如何かと思います。と申しますのは、週末の一泊では、日常の生活振りが理解してもらえないのでは？本当に遠慮なく家族の一員としてリラックスしてほしいです。又学校からの連絡の時、その人の趣味、興味ある事柄などお知らせ願えれば幸いです。

報告

国際理解の集い

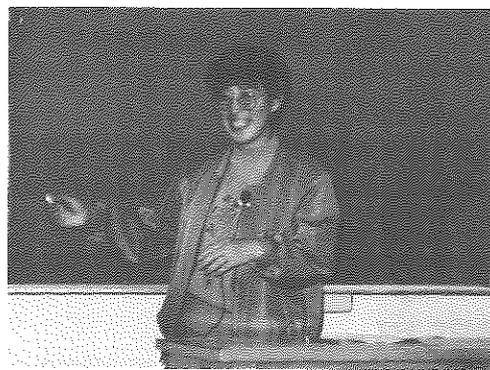
国際交流室 金丸 義 敬 (農学部)

今年度はじめての国際理解の集まりを11月6日に持ちました。様々な都合から開催が遅れてしまったこと、たくさんの日本人学生や一般の市民の人たちにも参加してほしいと考えたこと、さらには普段より時間を多くとることによって十分な会話時間をつくることができると考えたことから、思い切って大学祭の期間中に、大学祭の有志企画の一つとして、昼間に開催してみました。これは、長い国際理解教育の催しの中でもはじめての試みだそうです。

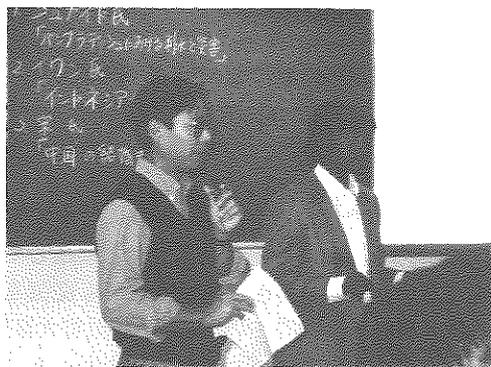
今回は、バングラデシュのジュナイドさんが「バングラデシュの災害と利水」、インドネシアのイワンさんが「インドネシアについて」、中国の宋さんが「中国の結婚式」と題して、それぞれのお国事情を、OHPやスライドや板書によって、わかりやすく、楽しく語ってくださいました。



イワン・ガントロさん



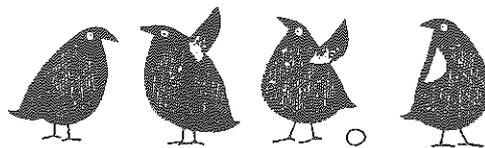
宋項光さん



ジュナイド・アーサレックさん (右)

大学祭期間中の土曜日の午後ということで、開催責任者としてはたくさんの聴衆が参加してくれることを期待していました。しかし、延べ30名弱の参加という結果だったようで、期待通りというわけにはいかなかったようです。でも、一つ一つの話の終わりではとても熱心なやりとりがあって、それなりに有意義な集まりだったと思っています。

次回にはもっとたくさんの日本人学生、教職員の人たちに集ってもらえるように、そして国際理解を肌で感じとることができるような集まりにするよう努力しようと思っています。



1993年度後期日本語クラス時間割表（平成5年10月12日～平成6年2月18日）

	月	火	水	木	金
1	BI-1 加藤 AII-① 河地	BI-3 及川 AII-③ 後藤	BI-5 中島	BI-6 河地	BI-8 中島 AII-⑤ 加藤 CII-2 後藤
2	BI-2 及川 AII-② 加藤 CII-1 河地	BI-4 後藤 CI-1 及川	[言葉の勉強会]	BI-7 中島 AII-④ 河地	BI-9 加藤 AII-⑥ 後藤 CI-2 六郷
3	DI-1 中島* (13:00～14:30)		[言葉の勉強会]	DI-2 及川* (13:00～14:30)	
4	DI-1 後藤* (14:40～16:10)			DI-2 六郷* (14:40～16:10)	

*…医学部クラス/at school of medicine

後期授業：10月12日（火）～2月18日（金）

冬休み：12月18日（土）～1月9日（日）

●編集後記

国際交流室の活動において、短期留学生の受け入れは大仕事のひとつではあるが、岐阜大学にはすでに多数の留学生が在籍している。同じ研究室内の留学生しか意識したことがなかったことを反省しつつ、意識してしまうこと自身、閉鎖的考え方だと再び反省してしまう。残念ながら、接する時間の長さが必要さが最も交流を強く推進している。(A.T.)

発行 岐阜大学国際交流室

NEWSLETTER 係

〒501-11 岐阜市柳戸1-1

☎ (0582) 30-1111

内線 2380 / 2381

FAX 0582-30-1108